

山本栄一さんを偲んで

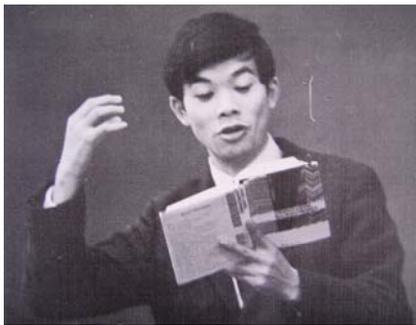


井上 琢 智

(前学院史編纂室長、経済学部教授)

突然のご逝去であった。体調がおもわしくないことは、12月の名誉教授招待懇談会へのご返事で知ることとなった。すぐに当時の村田治経済学部長へ連絡をとる一方、病院へ伺うため、日程調整をしてもらっていた。村田学部長は電話で山本さんとお話ができたと後から聞いたが、私は病院へお見舞いすることができなかった。「悔しい」のひとつである。

山本さんとの最初の出会いは、山本先生との出会いであった。先生は当時経済学部の専任講師になられたばかりで(1966)、私は新入生であった。専攻分野の違いがあり、学生として授業を受けたことはなかった。しかし、試験場での出会いは強烈であった。試験監督者として教室に現れたとたん「ああ～山本や。あかん！！」と学生の一声。厳格な試験監督者としての山本先生は、不正への、そして他者への厳しさの象徴の一人であり、それを自認されていたように思う。それは、今から考えると自らへの厳しさに裏打ちされていたものであった。



最初の出会いから3年たった頃：山本栄一専任講師と経済学部4年生の筆者

二度目の出会いは、1985年に二つ目の職場として関西学院大学経済学部が与えられたときであった。それから35年間。私の関西学院大学教員時代にあって、ときには同僚として、ときには先輩として、ときには教師として山本さんが私に与えた影響は計り知れない。

35年の間に山本さんから折々に数えきれないほどの助言をいただいた。最初の忘れがたい言葉は「経済学史の後継者を育てることが君の仕事だ」というものであった。この言葉は、その後の私の教員生活の一つの軸となった。山本さんは、大所高所から有益な指導を私だけでなく、私の院生にも与えてくださった。彼らは今や学位を取得し、大学で職を得て、その中の一人が今年経済学部の教員となった。山本さんとの約束の一つを果たすことができたと思っている。

常に私が意識させられてきたもう一つの言葉は「大学教員が教育者になれないのは、生徒・学生時代に『知的エリート』であった経験もっているから」である。「解からない学生の気持ちが分からない」と山本さんは自らを戒めておられた。

そんな山本さんと一緒に仕事をさせていただいた最初は、柚木学経済学部長時代であった。山本さんは、学部長室委員の一員(1987-88)として経済学部の運営の仕方を厳しく、しかし親切に教えてくださった。学部外の仕事についても、「学院・大学で何とかしないとイケないというのであれば」「その立場に立てるようになってほしい」(『経



二度目の出会いの頃

済学部70年史』2005、193頁）と考えた山本さんは、自ら学院史編纂室長、常任理事など多くの仕事を引き受けられた。その姿勢が、私の公務に取り組む姿勢の範となったことは確かである。

ご一緒した学部外の仕事のなかでもっとも大きなものは、関西学院史の編纂事業であった。最初の契機は、図録『関西学院の100年』（1989）への参加である。すでに関西学院教職員組合協議会『組合活動の記録』（1988-90）の編集委員長として活動していた私に山本さんからこの図録の「旗の章 紛争か創造か—紛争の嵐を越えて」の校正の依頼があった。立場の違う同時代人によるバランスのとれた原稿に仕上げるためであった。これが縁となってこの図録の書評の依頼があり（『関西学院史紀要』創刊号、1991）、さらに『関西学院百年史』（全4巻、1994-98）の編集委員会の委員就任が依頼された。この『百年史』は、委員長であった柚木学教授の学長就任によって、山本さんの実質的なリーダー・シップのもとに編集された。編集中の自由な議論は「関西学院の将来に対して何らかの提言ないしは問題提起が出来ないか」を模索する上で重要であり、大学紛争当時の若手教員の一人としての山本さんの苦悩がその議論の中に反映されていたのではないかと思っている。

この『百年史』編纂を前に開催された「座談会 関西学院百年史を考える」（『関西学院史紀要』創刊号）で山本さんは重要な発言をされた。「『兵庫県大百科事典』…<と>同じように『関学事典』というものを作れば、人物も出てくればいろいろな仕組みも出てくる。それは読み物にもなるし、資料にもなるわけです」と。この先見的な発言は、この座談会で平松一夫商学部教授の発言「総合コースに関西学院という講座」の設置と展開（1995～<井上琢智「いかにして大学の『建学の精神』を伝えるか—『関学』学』の位置づけと意義」『日本大学史紀要』第11号、2009>）とともに実現し、今なお関西学院大学の教育の中で大きな役割を果たしている。

この『関西学院事典』（2001）の「編集後記」で山本さんはこの編集事業の「エンジンをかけたのが井上琢智氏であった」と書いてくださったが、そのエンジンに絶えず燃料を注ぎ続けていたのは、まぎれもなく山本さんであった。その発想の自由さと熱意もまた、山本さんのものであった。この『関学事典』が『慶應義塾史事典』（2008）を生む一因となったことは特記すべきであろう（同編集員小室正紀教授の発言「『関西学院事典』<は>…、先輩だということなんです」『近代日本研究』第28巻、273頁、慶應義塾福沢研究センター、2011）。

この『百年史』編纂と『関学事典』の間に大きな出来事があった。それは前者の仕事を支えた学院史資料室（1979）が、時計台（旧図書館）に移転し（1998）、学院史編纂室と改組され（2000）、『関西学院史紀要』を復刊し（第6号）、『関学事典』が刊行されたことである。この改組は「次回の年史編纂の準備を続ける調査・研究を継続的に行う」ことであり、「時計台という学院が記念すべき中核的施設に位置すること」で「学院の過去と現在と将来を結ぶ『場』として作り代えること」（同6号、211頁）と宣言して、その室長を担ったのも山本さんであった。この学院史編纂室と関西学院大学博物館開設準備室（2008）とが合同し、関西学院大学博物館が創立125周年記念事業として設置されることになっているが、まさにそれは山本さんの宣言を実現する第一歩となるであろう。

『百年史』や『関学事典』に加えて『経済学部七十年史』編纂の仕事でも山本さんとご一緒させてもらった。その仕事の中でも山本さんの研究、教育などへの想いに接することができた。1980年代後半から進んだ経済学部の急速な世代交代を、山本さんは「家風に変化がおこる非常に大きな契機」（165頁）と捉えられた。大学教育のユニバーサル化にともなう「口を開けてサービスを待つ」学生の増加に対応するための教員の意識改革と保守的であった経済学部の改革の必要性を認められた。

学生の主体的学びを養うために始められた学生によるゼミ発表会、ソフトボール大会、『エコノフォーラム』の刊行、大学院教育の活性化などは、今なお経済学部の活動の軸であり、リール大学との国際交流、学術奨励金基金設置、学部叢書の充実などは、経済学部における研究の充実を目差すものであった。さらに、教職員の協働の開始など、時代に即した「家風」の改革を実行された。その出発点が「学部長経験者」の事前の同意であったことを考えると、まさに経済学部の転換に大きな役割を果たされたと言える。象徴的だったのは、経済学部長の任期を終えられた山本さんが慣例であった教授会の長老席に座られなかったことである。このような山本さんの言行があったればこそ経済学部での教員間の平等化、教職員の平等化が進んだことは確かである。「経済学部は急速に変わりましたよね。変わり過ぎたというくらいに」（179頁）という山本さんの実感がそれを示している。

しかし、山本さんには断固変わってはいけないものがあつた。それが端的に現れたのが柚木学学長時代の日曜入試制度導入への反対であつた。クリスチャンとして先生は、教会はもちろん経済学部や関西学院内で多くの活動をされた。加えて、教育においても「聖書と経済」などを担当されるだけでなく、設立(1997)以来理事長を務められた関西学院大学出版会から『問いかける聖書と経済』(2007)を出版された。そこで山本さんは「キリスト者が持つ自己の信仰とこの世の働きを一貫して捉えたいという内的衝動に応えたい」(269頁)と書かれているが、この「内的衝動」ゆえに日曜入試に反対せざるを得なかつたのだと思う。それを提案した柚木学学長自身もこの導入に対して「キリスト教主義学校としてこれまで日曜日には公式行事を行わない、という伝統を遵守しました。〈しかし〉…関西学院大学が教育機関として一定の役割を果たすためには、諸般の事情を考慮すれば、その導入をはかるべきだという決断をいたしました。もとより苦渋の選択でした」(『関西学院大学白書』1997、第一分冊、6頁)と述べているが、山本さん自身は、日曜日の教会活動ゆえ、学会活動にすら参加されなかつたのである。それはまさに「自己の信仰」と「この世の働き」を一貫して捉えようとする厳しいクリスチャンの生き様であつた。この山本さんから受けたクリスチャンへの誘いに、私は尻込みせざるを得なかつた。

大阪人としての文楽・歌舞伎好き、図書・資料の収集家、本好きの関西学院大学出版会理事長、多くの顔をもつた山本さんの全体像を語ることは私にはできない。しかし、キー・ワードで山本さんを表すとすれば「自由な発想、厳しさ、優しさ、バランス感覚、熱意」、そして山本さんに通底する「信仰」であろう。



1996年4月から2005年3月までの長きにわたり、学院史資料室長、学院史編纂室長を務められた山本栄一名誉教授(元経済学部教授)が、2011年12月10日、天に召されました。先生が「関西学院歴史サロン」でお話くださった「学院史編纂室30周年を迎えて—なぜ学院史編纂が必要なのか—」(『関西学院史紀要』第15号、2009年)を今一度胸に刻み、天上の先生に感謝と祈りを捧げます。 [学院史編纂室]



井上琢智学長がルース・M・グルーベル院長と共に第36回関西学院史研究会でお話しになります。
「Mastery for Service 100年—その歴史と今日的意味を考える—」
6月12日(火) 13:30~15:00、関西学院会館(西宮上ヶ原キャンパス)

ご紹介：森藤真成「イギリス小説に見る土地の霊—最終講義に代えて—」

「われ山にむかひて目をあぐ わが^{たすけ}扶助はいづこよりきたるや…」(詩篇121:1-2)。
関西学院西宮上ヶ原キャンパスにあってこの聖句から私たちが通常思い描くのは、正門から甲山に向かう情景です。しかし、筆者(執筆時文学部教授)は建物の中にあつてもなお、心中で山並みと大空をイメージすることができますと言います。それは、W. M. ヴォーリズが一部を除き、教室座席のほとんどを西向き、即ち山向きに設計しているように思われるからです。筆者によれば、その代表格は神学部本館2階のチャペルだそうです。経済学部本館、文学部別館の教室も多くがそうです(そうでした)。これらに対し、新しいF号館101号教室、201号教室やG号館にはそうした配慮が見られません。そのことを筆者は「残念」と言っています。さらに、文学部本館の地下室(通称「ブンチカ」)については、「『宗教的な気分』の『土地の霊』を顕わす代表例の1つ」と指摘しています。その理由については、『人文論究』第60巻第4号(2011年2月)に掲載された標記論文(71~108頁、特に73~75頁)をお読みになって、ぜひご自身でお確かめください。各種図版に加え、筆者撮影の今となっては貴重な写真も豊富に収録されています。

[学院史編纂室長 神田健次]